

## 「主イエスの家族」

2014年08月07日

**マルコによる福音書3章31節～35節。**「イエスの母と兄弟たちが来て外に立ち、人をやってイエスを呼ばせた。大勢の人が、イエスの周りに座っていた。「御覧なさい。母上と兄弟姉妹がたが外であなたを捜しておられます」と知らされると、イエスは、「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と答え、周りに座っている人々を見回して言われた。「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ。」

主イエスの家族は、父ヨセフ、母マリア、弟たちがヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの4人、また妹も複数いた。女性軽視の時代、妹たちの名は記されていない。マリアは7人以上の子どもが与えられた訳である。イエスはヨセフの子どもではないという。誰が父なのであろうか。ヨセフの実子である、またローマ兵による強姦説などもあるが、マタイ福音書は「聖霊によって宿った」と書いている。キリスト告白が生み出した記述で、私は福音書が告げる「聖霊」による懐妊を、信仰において受け入れている。父ヨセフは、福音書の始めに記されているだけなので、早くに亡くなっただろう。すると、母マリアは子沢山の寡婦になったということである。貧しい家庭であったろう。イエスは、父親の代わりに、母マリアを助け、弟妹たちの養育のために懸命に働いたに違いない。そして、イエスが30歳の頃、弟妹たちの養育に目鼻がついたのではないだろうか、故郷ナザレを去り、ガリラヤ湖周辺で「神の国」の宣教を始めた。主イエスは公生涯に入られた。

主イエスの「神の国」の宣教は民衆の圧倒的な支持と尊敬を集めた。語る言葉の真実と行う業の素晴らしさに、飢えと渇きを覚える民衆は群がった。それは、律法に縛られた差別と抑圧からの解放であった。主イエスがもたらした解放は、祭司、ファリサイ派の人たちが営々として築きあげてきた神の名による差別管理社会に風穴を開けることであった。彼らは、主イエスを敵対視し、命をも狙うようになった。食事も睡眠も十分に取れないような生活を強いられていた。肉体をすり減らす多忙と、権力者の反感を買っている状況を伝え聞いた家族は、主イエスの所に来た。もちろん、宣教活動を止めて、ナザレに戻り、家族と共に暮らそうと言いに来たのである。来てみると、主イエスの周りは人ばかりで近づけない。人を介して、母マリアと弟妹たちが来ていることを伝えた。家族の来訪を聞いた主イエスは「わたしの母、わたしの兄弟とはだれか」と言われた。長兄を心配して、呼び戻しに来た家族に、血のつながりをきっぱりと切った言葉である。主イエスは「共に生きよ」と恵み、祝福してくださる神の愛を示す使命に立っておられた。そして、民衆を見渡し、「見なさい。ここにわたしの母、わたしの兄弟がいる。神の御心を行う人こそ、わたしの兄弟、姉妹、また母なのだ」と言われた。神の御心を行うとは、神を信じ、隣人を自分のように愛することであろう。その者たちが、主イエスの家族であると言われる。

家族は支え、慰め、生きる勇気を与えてくれる。その家族関係が壊れ、児童虐待が年ごとに増えている。思いを言葉にできない子どもたちの悲しみ、苦しみを思うと胸が痛む。主イエスの時代、保護を受けられない子どもたちが多くいた。また、生きる場を失った大勢の人々もいた。彼らを自分のように愛する者が神の御心を行う人であり、主イエスの母、兄弟姉妹たちであるという言葉は、民衆を限りなく勇気づけたのではないだろうか。